

氏名	齋藤 あずさ
学位の種類	修士 (生活科学)
学位記番号	生修第237号
学位授与年月日	令和3年 3月15日
学位授与の要件	学位規準第15条第1項
特定課題研究成果題目	特定課題研究成果題目 地域再興計画：住民の地域再生に対する意識の把握と空き家活用の設計提案 —副題—長野県木祖村旧藪原宿を対象として
審査委員	主査 松原 小夜子 教授 副査 橋本 雅好 准教授 副査 加藤 和雄 教授

特定課題研究成果題目の要旨

1. はじめに

1-1. 研究背景

過疎化が進行する地域では、人口減少や少子高齢化、地域産業の停滞、農村の荒廃、社会資本整備の格差、空き家の増加など、様々な問題を抱えている。一方で、若い世代を中心に都市部から過疎地域へ移住する田園回帰や二地域居住が注目をされている。

このような状況において、地域資源としての空き家は、地域住民の交流や移住希望者の住宅、商業の場として再生・活用するなど、地域活性との連帯が求められている。

1-2. 研究目的

長野県木祖村旧藪原宿を対象として、現地調査により、宿場内の空き家の実態を明らかにし、また、木祖村観光協会主催のワークショップに裕建築計画と橋本雅好研究室で参画することにより、住民の地域再生に対する意識を把握し、藪原宿の空き家の活用方法の可能性を探ることを第一の目的とする。

上記から得た知見から、藪原宿での地域住民の生活水準の向上と、移住・二地域居住促進のための空き家活用の設計提案をおこなうことを第二の目的とする。

以上を踏まえ、今後の藪原宿における空き家活用の指針を提唱し、その中で他地域での応用可能な指針を明確にすることを目指す。

1-3. 対象敷地

対象敷地である長野県木曾郡木祖村旧藪原宿は、中央アルプスと御岳山に囲まれた木曾地域の北部に位置しており、少子高齢化が進行している過疎地域である。旧藪原宿周辺は、公共施設や金融機関など、木祖村の生活の拠点があり、国道19号やJR中央西線の藪原駅があるため、交通の面でも村の中心地となっている。

2. 現地調査

2019年7月から2020年9月にかけて計11回、現地調査を行った。具体的には、旧藪原宿街道沿いの建築群を対象に、外観(外部空間構成)と景観を把握するた

めの写真撮影と、空き家数の確認、木祖村地域おこし協力隊の協力のもと、5軒の空き家を対象に内部空間構成の把握するための写真撮影をおこない、そのうち3軒の空き家については、簡易な実測をおこなった。

現地調査の結果から、旧藪原宿の建築の平面構成は、街道側から、店、台所、座敷と、それをつなげる通り土間がある構成となっていたと考えられる。また、台所部分は吹き抜けと天窗があり、天窗からの光により、小屋組みと貫が美しく見えることがわかった。しかし、台所部分に天井を張っている建築もあった。街道側外観は平入、2階は出梁造りが特徴的で、裏路地側は増改築が繰り返された痕跡が残っていた。街道については、人通りや座って話ができる場所が少ない状態であった。

旧藪原宿の街道沿い124戸のうち空き家は29戸、空き家率は23%であり、全国平均の13.6%と比べると、高いことがわかった。空き地はまだ少ないが、今後空き家が増え、空き地になってしまうと、連なった建築が特徴的な宿場の面影が失われていくことが予想される。

3. 住民の地域再生に対する意識調査(ワークショップ)

空き家活用の長期的な展開に対する設計をするために、住民の地域再生に対してどのような意識を持っているかを把握するワークショップをおこなった。具体的には、木祖村観光協会が主催した「藪原宿未来プロジェクトワークショップ」に裕建築計画と橋本雅好研究室で参画し、地域住民に向けたワークショップを3回開催した。各回テーマを参加人数に合わせて2-3つ設定し、テーマごとに、ブレインストーミング、グループ化の流れで意見をKJ法を用いて分析した。この分析の結果から、住民の意見や将来像を把握し、旧藪原宿を中心とした木祖村の将来計画の方向性、また、設計する際の一助とする。

調査対象者は、村民を中心とした、木祖村にゆかりのある人(行政の呼びかけによる有志)とし、ワークショップ参加者は計42名だった。

観光に関するワードは、37.2%が「観光」をテーマとしたときに取り上げられ、また26.7%が「おおつたやの役割」をテーマとしたときに取り上げられていることから、空き家の観光に関する活用が求められていることがわかった。人に関するワードは、5つのテーマでバランスよく取り上げられていることから、様々な面で、人が重要視されていることがわかった。自然に関するワードは、60.7%が「木祖村の価値」をテーマとしたときに取り上げられていた。また、ワードの27.0%は「暮らしたい場所」をテーマとしたときに取り上げられており、取り上げられたワードが「木祖村の価値」で取り上げられたワードと類似していることから、暮らす上での自然環境について満足していることがわかった。店舗・機能に関するワードは、68.4%が「おおつたやの役割」をテーマとしたときに取り上げられており、空き家を活用した地域交流の拠点となる場所が求められていることがわかった。

4. 設計

4-1. 全体構想

現地調査・ワークショップ調査の結果から、木祖村が抱えている課題のうち、生活の質の向上、地域コミュニティの増加、関係人口・移住人口の緩やかな増加を図ることが、優先的に求められていることがわかった。そのために、まず「地域コミュニティの拠点」を計画し、次に「地域に開いた移住者の拠点」を計画する必要があると考えた。

対象空き家は、「地域コミュニティの拠点」として、藪原宿の北、湯川酒造の向かいに位置する米屋（元旅籠）を選定し、また、「地域に開いた移住者の拠点」として、藪原宿の中心付近に位置する新大坂屋（元住宅）、南寿屋（元下駄屋）の2棟を選定した。2か所とも大規模改修ではなく、耐震性能や環境性能の向上などの改修を行い、既存を活かす改修計画を提案した。

4-2. 米屋改修計画

「地域コミュニティの拠点」として、地域住民の居場所となるように、飲食・学習・作業など多目的な利用のためのテーブル・イスを配置した「土間広間」、ドリンク、菓子を提供する「カフェスタンド」、木祖村の農家の手料理の提供や、村外から料理人が期間限定で出張営業できる地域に開いた「みんなのキッチン」を計画した。また、旧宿場町でありながら宿場内に宿泊施設が一軒もない状況から、旅籠としての役割を復活させ、宿泊ゲストハウス型の機能も計画に含めた。

外観は、地域の景観を壊さないように、街道側は最低限手を加えるのみとし、街道に面し、かつ建物北側に位置する庭に開くように大きな開口をとることで、

街道とのつながりと土間を庭側に延長する広い空間が取れるように計画した。

構造的な主な対応として、北側に開口を取るために取り除いた分の壁追加と、既存建築が南北軸の壁量が少なかったため、壁を追加をした。

4-3. 新大坂屋・南寿屋改修計画

「地域に開いた移住者の拠点」として、田園回帰の考え方をもちうる生産人口の世代（20代-40代）、4組が移住すると想定し、また、移住者間の交流を図れるよう、シェアハウスを採用し計画した。

2棟の町家は隣接しており、壁を取り除くことで隣の町家と横につながり、間口が狭く奥行きのある使い方から、変化が付き、現代の多様な暮らし方、商い方に対応できると考えた。

平面構成は、街道側から、「ミセ」、「シェア」、「スミカ」とし、既存の構成を継承した。「ミセ」はランドリーとコワーキングスペース等、「シェア」はLDKと水廻り、「スミカ」はシェアハウスの個室を計画した。また、「ミセ」、「シェア」については、2棟の間の壁を取り除き、空間をつなげることで、間口が広く開放的な空間となるよう計画した。

「シェア」は、シェアハウスの住人だけでなく、ランドリー、コワーキングスペースの利用者にも利用できるようにすることで、移住者間だけでなく地域住民との交流が生まれるよう計画した。また、「ミセ」は、シェアハウスの機能を補完する機能である「ランドリー」を配置し、地域住民との交流促進を図った。

構造的な主な対応としては、新設の壁には筋交いを入れた土壁とし、構造的な補強を図った。

将来、移住者の家族が増えるなど人数変動があった場合や、新たな移住者の住居を整備する際に、さらに隣の建物の壁を取り除き、内側の空間をつなぐことで、景観を保ちながら、「地域に開いた移住者の拠点」が成長していくことを想定した計画とした。

5. まとめ

現地調査とワークショップ調査により、住民の地域再生に対する意識を把握し、設計提案から藪原宿の空き家の活用方法の可能性を探ることができたといえる。また、設計で提案した、隣接する町屋の間の壁を取り除き、空間をつなげる計画は、その他地域でも応用できるといえる。

藪原宿のような場所では、これで終わりではなく、継続的な空き家再生が必要であり、住民からのニーズが生まれるたびに再考し、一過性の大規模な改修ではなく、住民に寄り添った小規模の再生を続けていくことが大切である。